

茶の多収性新品種の特性

「せいめい」「はると34」 被覆栽培で品質向上

現場で使える！
研究成果

国内で生産される茶の品種は「やぶきた」に偏っており、病害虫の多発や作期の集中などの問題がある。また、ドリンク原料用や輸出用などニーズの多様化も進み、これらに対応した新品种が必要とされている。このような中、やぶきたに替わる新品种として、2020年に「せいめい」と「はると34」が品種登録された。せいめいは農研機構が育成したやや早生の品種で耐病性、耐寒性がある。はると34は宮崎県が育成した極早生の品種で製茶品質に優れているが、凍害に対する抵抗性が低いため暖地に適している。しかし、作期な

表1 収量性比較

品種名	摘採日	一番茶			二番茶		
		収量 (kg/10a)	百芽重 (g)	出開度 (%)	収量 (kg/10a)	百芽重 (g)	出開度 (%)
せいめい	5/2	450	68.3	50.3	261	46.3	57.3
はると34	4/29	617	64.4	44.8	300	43.4	29.4
やぶきた	5/1	235	52.7	43.7	126	47.6	27.3

注) 数値は3カ年の平均値

表2 製茶品質評価

品種名	処理	一番茶製茶品質			二番茶製茶品質		
		外観	内質	合計	外観	内質	合計
せいめい	被覆	16.3	20.5	36.8	9.3	14.2	23.5
	露地	13.3	17.5	30.8	8.8	13.7	22.5
はると34	被覆	16.2	22.7	38.8	11.8	15.7	27.5
	露地	14.2	19.7	33.8	10.7	13.5	24.2
やぶきた	露地	14.8	17.7	32.5	7.5	14	21.5

注1) 外観(形状、色沢)、内質(香氣、水色、滋味)は、各項目10点の計50点

注2) 品質評価は5人の合議制により評価

注3) 数値は3カ年の平均値

どの品種特性には気候の違いによる地域間差がある。

そこで県内における収量性、製茶品質や被覆特性に

ついて調査した。その結果、せいめいはやぶきたより摘採日が1日遅い中生で、収量は一・二番茶いずれも約2倍程度多く、製茶品質は同程度。被覆栽培を中5日間行つことで品質が向上した。
はると34は低温による芽つづれの影響で、やぶきたより摘採日が2日早いやや早生となった。収量は一・二番茶いずれも2・5倍程度多く、製茶品質はやや優れ、被覆栽培を中5日間行うことで品質が向上した。
(農林技術開発センター)